



大鵬がいたからこそ(中)

八百長疑い共に反論

昭和38(1963)年秋場所の全勝優勝は柏戸現役時代の一番の思い出として語られる。途中休場を含め4場所連続休場明けの場所

で、千秋楽・大鵬との全勝同士の対決を左四つからの寄り切りに制し、男泣きに喜びをかみしめた。

しかし悪夢のような出来事が襲いかかってきた。優勝の5日後、日刊スポーツ紙で作家・石原慎太郎が「い

い加減にしる」の表題で八百長相撲と断じたのだ。一番最初に「事実無根だ」と猛抗議をしたのが相撲協会だった。元横綱双葉山の時津風理事長は「腹が立つて仕方ない。両横綱だけで

はなく全力士を侮辱した記事だ。黙っていれば、認めることになるので告訴の手続きを取る」と反応は早かった。

塩原滞在中寝耳に水

右肩にケガを負い再起を懸けた苦しい療養生活を支え、励ましてくれた栃木県塩原温泉の国立温泉病院や地元中学生たちに感謝のあいさつに赴いていた柏戸にとつても、まさかの冷や水

「柏戸戦は八百長の記事に相撲協会物いい」



だった。「記事を見て腹が立つばかりだ。場所前から一生懸命やることだけを心掛けてきた。筆者の非常識にあきれると反論、悲しげな表情を見せた。大鵬は「力いっぱいやった相撲だった。故障明けの柏戸関に同情はしたが勝負は別物だ。とにかく共に全勝優勝が懸かっていたんだ。いい加減な相撲を取れるわけがない」とこちらは怒りで体を震わせた。

慎太郎苦し紛れ抗弁

専門的な見方で否定したのが日頃辛口で鳴った相撲評論家・彦山光三だった。「あの一番は絶対そうではない。もし八百長ならもつと派手な勝負になる。取り口は大鵬がもろ差して攻め

込んでいた。柏戸は見事なおっつけで相撲協会の石原氏告訴を伝える当時の毎日新聞

石原は「自分が感じたことを率直に述べただけだ。証明するものはないが、同時に八百長でないという証拠もない。テレビでの勝負を見ていて八百長だと思



モスクワに向かう途中、大きな淡水魚にびっくり(左は北葉山)

負を見た人はボクだけじゃない。告訴とは面倒なことになったが、新聞社と相談して決めた」と抗弁した。ただ「八百長でないという証拠はない」という言い方は、苦し紛れにしか聞こえないものだ。石原にとって、いきなり告訴の動きは予想

外だったようで、受け狙いもあつた記事の計算違いが見え隠れした。結局強気の相撲協会に石原は謝罪して、和解となった。

大鵬の慰めに大粒涙

協会上層部からの事情聴



ズなどの淡水魚に驚くシー

取の過程で大鵬から「悔しい思いをしましたね」と声を掛けられた柏戸はボロボロ大粒の涙を流した。思い付き自分の作家から八百長と書かれたが、対戦相手から心の底からねぎらわれたのが救いだった。大鵬の心

戦後初のソ連公演

○：戦後初となった大相撲ソ連公演(昭和40年7

8月)で柏戸は力士団を代表した。横浜から「バイカル号」という名前の大型船に乗ってナホトカ入り。ハバロフスクではシベリア抑留死亡者への供養の土俵入りが奉納され、その後モスクワに向かった。途中シベリア鉄道にも乗り、大ナマ



バイカル号はテープの嵐の中、横浜港を出港。柏戸の真ん中は佐田の山

毎週火曜日付に掲載